美術科教育学会通信 No.69　2008. 10. 1. 発行

通信事務
〒448-8542　愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢１
愛知教育大学 創造科学系 美術教育講座内 美術科教育学会本部事務局
事務局 E-mail／bikiga@m.auecc.aichi-edu.ac.jp
藤江充(学会代表理事) ー研究室 TEL0566-26-2444
礒部洋司(事務局長)　ー研究室 TEL0566-26-2447
樋口一成(広報担当)　ー研究室 TEL0566-26-2449
〈三重大学〉上山浩（Web 担当）E-mail／ueyama@edu.mie-u.ac.jp

代表理事挨拶

美術科教育学会代表理事　藤江　充

朝夕はめっきりと涼しくなりましたが、会員の皆様におかれましては､ご清栄のことと思います。

インセア(InSEA)大阪国際会議も、8 月 9 日に閉幕しました｡美術科教育学会からも多くの会員が、参加・発表、運営と活躍されてきました。協賛団体として本学会は招待セミナーの開催、学会紹介英文パンフレットの配布などを行いました。祭の後の余韻にひたる間も無く、また、通常業務に追われている方も多いと思いますが、この大会を成功させたエネルギーを持続させたいものです。

大会の詳細は、全体の運営や学会主催のセミナー､そして学会紹介英文パンフレットに関しても、この『通信』で報告されていますのでご覧下さい

さて、８月の理事会の報告も本号に掲載されていますが、代表理事として次の６点を会員の皆様にご報告かつお願いしておきたいと思います。

１）理事選挙の件です。来年が選挙年にあたります。理事会では、理事の年齢制限と男女のバランス問題を議論して来ました｡理事候補者について、特定の年齢や男女の枠をはめることは、会員すべてが被選挙人になるという選挙の原則からいっても、実務的な作業からいっても現時点では難しいという結論になりました。選挙規定は基本的には改正しません。個人的には、若手の会員や女性からも理事が選ばれることを期待しています。

２）韓国の造形教育学会(SAEK: Society for Art Education of Korea)との学術交流協定の件です。3 年前の第 28 回全国大会（京都教育大学）の総会で協定締結を進めていくことが承認され、今年３月の群馬大会でも再確認された事項です。途中、事務局の交代などもあり遅れていました。インセア大阪会議には、韓国造形教育学会からも会長の李先生をはじめ多数の会員が参加されましたので、その機会を利用して、具体的な協定の文書を協議しました。

３）会員名簿の作成の件です。これも群馬大会の総会で承認されました。そのための会員調査カードの記入をお願いしていますが、現在、回収率は７０％程度です。発行は今年度内を予定していますので、まだ返却されてないかたは鋭意、ご返送いただけるようお願いします。

４）国内美術教育関連学会との連携の件です。美術教育をめぐる状況が楽観を許されないところに来ていることは会員の皆様のご存知の通りです。現在、大学美術教育学会、日本美術教育学会などでもそうした認識のもと、連携協力しながら美術教育を大きな力としていこうと努力されているようです。美術科教育学会としても、そうした連携協力を進めていきたいと考えています。総論は賛成でも各論レベルではさまざまな問題が出てくることが予想されますが、筋道をつけておく必要があると思います。

５）今回、同封しました新学習指導要領の英語、中国語、韓国語訳のパンフレットの件です。これは奥村高明教科調査官を代表とする科研費で作成し、インセア大阪会議で参加者に配布したものです。直江理事と私も分担者で、二人に配分されました分から各会員当てに１部を学会紹介英文パンフレットとともに同封しましたので活用していただければ幸いです。

６）最後に『学会通信』への研究ノートや書評・文献紹介等の投稿のお願いです｡自薦･他薦を問いません。多くの会員の方からの投稿をお待ちしています。

INSEA国際美術教育会議世界大会を終えて

InSEA 大阪大会 副会長　花篤　實

８月５日から９日まで、大阪国際交流センターにおいて第３２回世界大会が開かれ、1200 名の参加者を得て、大盛会の内に無事幕を閉じる事が出来ました。これも学会会員皆様方の力強いご支援があった賜物と厚く感謝申し上げます。

２年前に InSEA 誘致の話が出た折、既に北京がオリンピックと重ね立候補している話なので、向こうは国家あげての支援活動だし、正直こっちに来る事は無いだろうと、気楽な気持ちで福本さんの依頼に乗ったのが運の尽き、最長老という事で、何時の間にかまとめ役というより心配係と行った立場で旗ふりをして来た始末です。後期高齢者群に入って体力や気力も衰え、余り役立たなかったのではという反省もありますが、それこそ獅子奮迅の働きで、今回の大会運営に全力で当たってくれたメンバーの多くが、私が以前学会の代表を引き受けた折に、この学会の事務局なり運営を担ってくれた人たちだったので、その意味でも、この学会に感謝しなければなりません。

もともと今回の InSEA 大会は、この学会が主催団体として受けるべきだと、誘致前後の学会理事会で発言した覚えがあります。40 数年前の東京大会での経緯や財政問題等で、見送られたと思いますが、私は今後、こうした国際会議や学会を引き受けるのは、国内の学会であるべきだし、特に内容の整った美術科教育学会で有ると思います。確かに我が国の教育体制の場合、伝統的なタテ社会構造で、教育現場と大学等の研究機関が並立し、なかなか個人として交流し難い構造が有るのは確かですし、背後に契約社会を持ったアメリカの NEAE のように何万という会員を擁する構造とは違って、学会が教育現場を網羅することは困難だと思います。

かっての東京大会の時代は、今日のような形での学会は無く、教育現場の集会組織である全国造形連盟が主になり、受け入れ機関として美術教育連合が作られたように記憶しています。今回私が大阪を拠点とした教育美術連盟を柱に造形教育連盟にも声をかけ、プレ InSEA として３、４、５の３日間にわたって公開授業を内容に全国大会を展開したのは、東京大会の経緯も含むと同時に上記の並立状況に一つの風穴を空けたい意もありました。勿論動員活動はイベントなり集会の大きな要素ですし、それはまた基本的な問題である財政や予算に直接関わってきます。

美術科教育学会も、毎年の本学会の動員も 200 から 300 に終始していますし、他の学会の情報も同じようです。共通した美術教育研究や課題に一体化して取り組む、交流し合う、この課題のために INSEA 大会はまさに格好の機会でもありました。ただ実際の問題として 1500 名以上の動員を果たしたこの全国大会の参加者で INSEA 学会の方にどれだけ流れたか？両者に渉って活動した人は何人か？　残念ながらデータは掴めていません。予想を超えて沢山の参加者が溢れて、正直な所それぞれの運営者やコーディネーターも自分の持ち場に手をとられ、両集会の内容や行事の交流にまで及ばなかったのは残念でした。

ややもすると今日の状況下で、美術教育の沈滞を指摘する声も大きかったと思います。そうした中で暑い大阪の地に一週間にわたって、3000 人に及ぶ美術教育者が動いたというのは、どうした事情か？今後時間をかけて分析をしたいと思っています。最近の教育の市場化に伴う業績主義や評価、実際夏休みの指令研修として参加した現場の声も耳にしました。何れの理由にしても、そうしたニーズに応ずる研究や研修の場の提供を今後も学会活動として社会的な交流としても重視しなければならないと思います。社会との関わりという事では、今回資金集めでは最後まで悩まされましたが、財界での募金活動等での情報不足で、美術教育や研究での社会的知名度は全く少なく、こうした面でも社会的な活動の必要さを感じました。この学会からも国際的な著名研究者が輩出され、活躍されんことを願って止みません。

３年前のオランダ、ベルギーでの INSEA 大会が、資金難で開催間際に中止されたのは、記憶に新しいことです。今回そんなことがあれば、INSEA そのものが消える、そんな使命感があっただけにともかくも、成功裡に大阪大会が終了したことは、内容や運営に色々と不備が有った事は十分に反省するとしても、多少の充足感を持って報告出来た事を感謝します。

美術教育の架け橋

InSEA 大阪大会 事務局長　岩崎由紀夫

　芸術のもつ社会的な教育力、コミュニケーション力をアピールし、各国の美術教育の研究者、実践家が力を結集させ、国際的な交流を通じて、今まで以上にさまざまな伝統・文化を理解する架け橋をつくり、世界平和に寄与する方途を模索すること。そして、芸術と産業との連携の可能性を模索し、基礎的な学力形成における認知的な側面と感性、想像力の関係性の再考と教育再生の可能性を検討することが本事業の実施目的でした。大会は８月９日午後３時無事閉会式を迎えることができました。組織委員会事務局長、総務局長・財務局長という大任を皆様のご協力・ご支援のお陰で終えることができました、といっても現在も残務が大変です。後援名義報告書、助成金等団体への報告書作成、概要集の送付、会場費約１２００万円､機材費約６００万円の支払い等々があります。最終の報告にはもう少し時間が必要です。

　写真で大会の余韻を味わってください。

開会式会場

開会式・挨拶

レセプッション

研究発表

ワークショップ

InSEA 評議委員会

　美術教育の架け橋として、国内・世界へ発信することができ、大会が盛会に終わることができたことが何よりの歓びです。

　ご協力・ご尽力ありがとうございました。

InSEA 世界大会・大阪での美術科教育学会主催シンポジウムの報告

美術科教育学会代表理事　藤江　充

2008 年 8 月 6 日（水）
午前 10 時－12 時　国際交流センター・ルーム１
テーマ「美術教育にとっての『感性』と『認知』の意味」“Significance of *Kan-Sei & Cognition* for Art Education”

発表者：
アーサー＝エフランド(オハイオ州立大学名誉教授)
ケビン＝タビン（オハイオ州立大学准教授）
奥村高明（文科省教育課程調査官）
池内慈朗（福井大学教授）

コーディネータ：
ふじえ　みつる［藤江　充］(愛知教育大学教授)

このシンポジウムの趣旨は、美術教育における「感性」をめぐる議論を、「認知(cognition)」能力という観点から美術教育のあり方を見直しを提案しているエフランド博士の見解と合わせて検討し、「感性」の志向するものを確かめようとすることにあった。

エフランド博士は途中で来日できなくなることがわかり、彼から推薦のあったオハイオ州立大学のタビン博士に代理発表とエフランド博士の見解に関するコメントをお願いした。エフランド博士の発表は、「認知における６つの革命」をへて、デカルト的二元論を克服して、メタファーを通して想像力を働かせるという「認知」の観点から美術教育の見直しを主張する内容であった。

これに対して、タビン博士は、エフランド博士による「認知（コグニション)」に対照させて、美術教育における「ミス・コグニション(mis-cognition)」の意義を、ラカン等の精神分析の立場から主張した。芸術は無意識に支配される面があり、それがミス・コグニションとして現れるという。

奥村調査官からは、新しい学習指導要領における「感性」について、子ども自身の感覚や感じ方、表現への思いなどを働かせることを「感性を働かせて」という形で目標に位置づけたが、そこには関係性の上に立つ人間という「開かれた子ども」の像があるという発表があった。

池内教授からはハワード・ガードナー等による芸術の認知論的な研究成果を踏まえて、多元知性理論(ＭＩ理論）の観点からも、「感性」を研究していく意義に関する提案があった。

フロアからは、美術におけるミス・コグニションについて、それは判断の正しさとはどのように関わるのか、感性とキーコンテンシーとの関連等についての質問があった。

コーディネータ兼司会としての藤江から、美術教育におけるコグニションとミス・コグニションをめぐる議論は、創造美育協会と新しい絵の会との間で行われてきた、認識か感動かの論争と重なること、「感性」は感動も認識も包み込んでいく能力として期待できることが確認された。

参加された聴衆の数ははっきりしないが、150 部用意した翻訳資料が不足したようである。InSEA 会長のアン・コウ博士をはじめ、基調提案をされたブレント･ウィルソン博士なども参加されていた。詳細は、大会概要集（pp.96-103）を参照していただきたい。また、大会事務局から招待セミナーの報告集を（決算次第で）出すかもしれないとも聞いている。今回は、とりあえずの速報としたい。

シンポジウムの発表者
（左からタビン准教授，奥村調査官，池内教授）

InSEA 国際美術教育学会に参加して
～美術教育界の今後を見据えて～

東山　明（近大姫路大学）

(1)InSEA 大阪大会の成功の意味

第 32 回 InSEA 大阪大会は、大会副会長・花篤實氏、大会実行委員長・福本謹一氏、組織委員会事務局長・岩崎由紀夫氏を中心とした組織委員会が役割を分担し、実によく結束し見事に成功させたことに、まず敬意を表したい。そして本当に身を削る思いで終始動いてくれた方々に心よりご苦労様と感謝の意を表したい。

この体験は、みなさんの今後の研究活動や生き方に、きっと生きてくる貴重な体験になったことと思う。本誌をかりて、本当に有り難うといいたい。

わたしは InSEA には、過去 3 回参加したことがある。28 回のカナダ・モントリオール(1993)ではコンベンションセンターとケベック大学キャンパスでの大会で、イベントも多く盛大な大会であった。30 回のオーストラリア・シドニー(1999)でも近くの大学などを生かしたワークショップなどで多彩な大会であった。そして、第 31 回アメリカ・ニューヨーク(2002) では、ブロードウエーの大型ホテルを使っての大会で、まとまってはいたが発表以外のイベントが少なかったように思った。日本からは毎回１５～３０数名の参加者であった。その他、InSEA アジア会議(1999)では、東京・青山学院大学での大会で、大学を使っての大会で親しみやすい大会であったように思った。

今回の大会では、規模としてニューヨークの大会に匹敵する大会であった。なかでも全造連の研究大会が併設され、外国人にとっては日本の教育の学校現場を直接見ることができて好評であったとのことである。今回の大会が参加人数も多く、多彩なイベントが開催されたのは、美術科教育学会だけでなく、先に述べた全造連や日本美術教育学会、日本教育美術連盟、近畿圏の美術教育の研究組織などがひとつになって開催できたことの意味が大きい。最初は美術科教育学会の大学人が中心で、どう参加者を広げていくかが大きな課題であったが、今大会の最大の成功は日本の美術教育の研究組織、研究団体、画材や教科会社書関係などがひとつになって参加してくれたことの価値が大きい。

(2)日本の美術教育界の今後の契機に

いま、日本の美術教育は、人によっては「瀕死の状態だ」といわれるぐらい停滞している。美術教育団体はそれぞれ努力しているが、自分の団体を保持することがやっとで、横のつながりが少なく、ひとつの声になってこないことが最大の課題である。今回の大会での大きな意義は、日本の美術教育の諸団体がそれなりに参加して、国際美術教育のなかで日本の美術教育の面目を国際的に知らしめたことであろう。美術教育の今後を考えるとき、このような組織をまとめる機関というか連盟を組織して､日本の美術教育を内外に広げたり、声を上げていくそのような連盟を改めて組織する必要を感じた。たしかに日本美術教育連合のような組織があるが、日本の美術教育の学会、民間美術教育団体、連盟など総ての組織の代表者が、年に 1 度でいいので同じ席に集まって、日本の美術教育の課題や今後について話し合い、それを声にして内外に広げていく「美術教育運動」の必要性を強く感じた。

今回の InSEA の結束と成功をこのまま終わらせてしまうのではなく、それを契機として日本の美術教育界の今後にどうつなげていくのがよいか、それが今後の課題であり、InSEA が、ひとつの節目になってくれることを期待している。

InSEA 会場にて

第 30 回美術科教育学会　群馬大会を終えて

運営委員長　新井哲夫（群馬大学）

１．はじめに

第30回美術科教育学会群馬大会は、3月２８日(金)、２９日(土)、３０日(日）の3日間にわたり、４つの研究部会コロキウムと 77 件の研究発表が行われ、全日程を無事終了することができました。３日間の参加者は２５３名でした（スタッフを除く)。藤江充代表理事をはじめ、大会開催に際してご支援をいただいた関係各位、充実した研究部会コロキウムを企画運営していただいたコーディネーター及びパネリスト各位、幅広い分野・テーマにわたり日ごろの研究成果を発表していただいた発表者各位、そして積極的に議論に加わっていただいた全ての参加者の方々に改めてお礼申し上げます。

以下、群馬大会について報告します。

２．群馬大会の企画について

今回の大会テーマは、厳しい状況に置かれている美術教育の現状を直視しつつ、状況を打開するためには、一見迂遠に見えても、自らの足元を見つめ、地に足を着けた研究や議論を積み重ねることによって、美術教育の足腰を鍛えることが必要ではないかとのメッセージを込めて、「美術教育の草の根―理論と実践の連関―」とした。

その上で、企画にたって考慮したことは、学会として社会に向けて何を発信できるかということである。年１回開催される大会の意義や役割について鑑みる時、大会の主要な役割として、会員個人又はグループによる研究成果の発表及び議論の場を提供することと共に、学会としての何らかのメッセージを社会に向けて発信することが挙げられると思われる。本大会では、研究発表のプログラムを個人又はグループによる自由研究と研究部会が企画するコロキウムの２本の柱で構成することにした。つまり、現在活動を継続している４つの研究部会の取り組みを、学会として社会に向けて発信できる課題研究の成果発表として位置づけたわけである。

懇親会で挨拶する藤江代表理事
（後方右は鈴木守学長、左は松田直教育学部長）

３．大会における研究部会の位置づけ

研究部会については、これまでの大会ではその処遇が必ずしも定まっていなかった。昼休みなどを利用して情報交換の場が設けられたこともあるが、全く設けられなかったこともある。第 28 回京都大会（2006 年 3 月）で研究部会の会合が「コロキウム」としてプログラムに位置づけられ、参加者から一定の評価を得た。このことが今回のコロキウム開催の直接的なきっかけである。

研究部会の在り方については、過去に筆者もメンバーの一人として検討に加わったことがあるが、本部事務局の交代時期と絡み、具体的な結論をとりまとめるまでには至らなかった。一方、現在学会の対社会的活動として行われているものに、研究部会と東西の地区部会がある。それらの活動を今後どのように継続、発展させていくかは、その見直しも含めて、今後の重要な課題と思われるが、社会的な役割を担う学会として、個人又はグループによる研究を支援するとともに、重要な課題に対応する共同研究や課題研究などの充実を図り、社会的な要請に応えることも必要ではないかと考える。今後開催される大会においても、研究部会が学会における共同研究あるいは課題研究の一つとして明確に位置づけられることを望みたい。

４．群馬大会の概要

研究発表については、発表時間を 20 分、質疑の時間を 10 分、計 30 分を確保した。質疑の時間を 10 分に伸ばしたことにより、発表後のディスカッションが多少なりとも充実できたのではないかと考える。

研究発表者の内訳（発表者が複数の場合は筆頭者の所属をカウント）は、大学院生が 19 名、小・中・高・養護学校教員が 22 名、大学・専門学校教員及びインディペンダントスカラーが 32 名、美術館・博物館学芸員が２名、造形教室・研究所の指導者が 2 名であった。

研究発表の内容をテーマ毎におおまかに分類すると、鑑賞教育及び批評等に関わるものが 17 件、美術教育史が 13 件、理論及び原理的考察が 10 件、授業・カリキュラム・題材開発等に関わるものが 34 件、その他が３件であった。なお、授業・カリキュラム・題材開発等に関わる発表の中には、表現と鑑賞の関連や一体化を取り上げたものが４件含まれている。

研究部会コロキウムについては、２部会ずつ時間をずらせて開催することにし、関心のある部会に少なくとも２つ参加できるように配慮した。この措置については、おおむね好評であったと考えている（各部会の詳細については、次頁以降の研究部会報告を参照のこと）。

なお、本大会では、研究部会コロキウムを２時間ずつ２コマ設け時間的にゆとりがなかったため、記念講演は設けなかった。そして、記念講演の謝金に相当する金額を、コロキウム開催の諸費用として各研究部会に援助した。

５．大会を振り返って

大会全体を振り返り、今後検討が必要と思われることがらを以下に記しておきたい。

(1) 開催時期について

美術科教育学会の大会は例年３月末に開催されている。その理由として、学校現場の実践者が参加しやすいようにという配慮からと耳にしたことがある。しかし、３月末は学校現場の実践者にとって参加しやすい時期なのだろうか。群馬大会でも、地元の実践者の参加を期待し、会期を週末の３日間に設定した。しかし、期待していたほどの参加はなかった。運営側としても、翌々日は年度初めという慌ただしさで、大会を落ちついて振り返る間もなく、新しい年が走り出してしまったという印象が強い（群馬県では例年小・中・高校の修了式が３月 25 日前後に行われるため、一週前倒しすることはできなかった）。もう少し落ちついて開催でき、参加できる時期を検討する必要があるのではないか。

（2）運営体制について

本大会の準備、運営に関しては、院生や学部生の協力が大きかった。昨年度は、大学院の１、２年次に現職の教員が１名ずつ在籍しており、彼らを含め院生が計 11 名おり、さまざまな点で大いに助けられた。もし、現職教員が在籍せず、院の在籍者が定員（２名）に満たないような状態では、大会を引き受けることは困難だったであろう。

大会を開催することによる学生への教育的効果には多大なものがある。多くの大学が過重な負担を強いられずに大会を開催できるような条件整備（マニュアルの作成など）が必要ではないか。

（3）研究発表に対するフィードバックについて

質疑の時間を多少長くとったとはいえ、議論を深めるのに十分ではなかった。発表後議論を深めることが時間的にむずかしいとすれば、公正な立場で発表を批評、評価し、それを発表者にフィードバックできるような工夫も検討する必要がある。

授業研究部会コロキウム報告
図画工作・美術科の「授業」とは？

部会事務局　大泉義一（横浜国立大学）

本部会のコロキウムは､学会の初日に行われた。会場が一杯になる程の参加があり、授業研究に対する関心の高さがうかがえた。

パネラーは次の通りである。

人見和宏氏（滋賀県大津市立粟津中学校）

足達哲也氏（群馬大学附属小学校）

刑部育子氏（お茶の水女子大学）

なおコーディネーターは、大泉義一（横浜国立大学）がつとめた。

本部会では３年間の計画で、授業を中心とする実践研究の手引き書『美術科教育における授業研

究の方法論』（仮題）を作成するためのプロジェクトを立ち上げ、活動を進めてきている。本コロキウムは、その追究活動の一プロセスである。目的は、人によって様々な「美術（造形）観」「表現観」「授業観」にスポットをあて、フロアを巻き込んだ議論を行う中から、授業研究に関する何らかの示唆を得ることにあった。具体的には、研究対象や所属学校種が異なる３名のパネラーが、それぞれの立場から「美術（造形）」「表現」「授業」等について自説を述べ､それらをすり合わせる中から、図画工作・美術科の授業に存在する固有の性格や特色、あるいは拡張する意味や「観」の差異について考え合うことにあった。

以下、当日の進行概略にしたがって振り返り、報告としたい。

まず、パネラーからの問題提起がなされた。その要点は次の通りである。

人見氏；授業とは、教師が伝えたいことを生徒がしたいことに転化していくプロセスである。美術教育の授業研究では､“題材集め”が授業研究であると誤解されているが、真正の“題材開発”がなされるべきである。それは目の前の子どもの姿から授業を語っていくことに他ならない。

足立氏；今後の美術教育実践では、共存・共生がテーマになってくるのではないか。そこでは他者受容が重要であり、協働の学びの実現が求められる。知識・技能もその獲得ではなく、学習に置いてどのように構成されるかに意味がある。

刑部氏；教科外からの視点を大切にしたい。PISAの学力調査で明らかになったこととして、日本の子どもたちが、試験が終われば忘れるような勉強に終始していて、答えが一つではない問いに対して挑むこと、本当の意味での学習ができない状況にあるということが挙げられる。教師は、知識・技能を伝達する存在ではなく、子どもとともに文化の中に埋め込まれているそれらを探索していく立場であるべきである。

以上のような問題提起をもとに､パネラー同士、パネラーとフロアとのセッションを行った。その中では、図画工作・美術科の学習における協働的な関係性をとらえることが重要であること、そこでの教師の役割モデルが、従来は「Ｉ-Ｒ-Ｅ（Instruction-Response-Evaluation／教授-反応-評価）」であったのに対して、これからは「Ｉ-Ｒ-Ｆ（I-R-Following／次につなげていく応答）」であるべきことが確認された。

参加者の意見としては、次のようなものがあった。「美術科は､「知の伝達」よりも、試行錯誤を通して「知恵を身に付ける（構築する）」力を育てる教科である。よって教師の役割は、子どもが学ぶための場や状況を整え、動機付けを行うコーディネーターであるべきだ。すると授業研究は、子どもが何を学んだか、子どもにとっての授業の意味、という視点からとらえていく必要があろう。」

今後は、本コロキウムで明らかになった図画工作・美術科の授業の特質を踏まえた授業研究方法について議論していく見通しである。

授業研究部会コロキウム(2008.3.28)

アートセラピー研究部会 コロキウム報告

部会代表　長谷川哲哉（和歌山大学）

今回の研究部会コロキウムは、主題を「美術教育とアートセラピー―美術教育の新たな視点と可能性を探る」と設定して、コーディネーターを長谷川哲哉（和歌山大学）が、報告・発表者を栗山裕至（佐賀大学）と吉田悦治（琉球大学）が務めて、以下のような順序と内容で展開した。参加者は約 25 名であった。全員に本研究部会通信の第 4 号と５号が配布された。

まず栗山が以下のような 2006 年度本研究部会活動報告を行なった。：2006 年 9 月 16 日に福岡教育大学ヘルスセンターにおいて、同センター長で同大教授の宮田正和氏による講演とワークショップを開催した。参加者は約 20 名であった。心療内科の医師で臨床心理士の同氏より「心療内科医から見たアートセラピーの基礎」と題した講演があり（その際のレジュメのコピーがコロキウム参加者に配布された)、その後参加者全員が「風景構成法」や「箱庭療法」を貴重にも実際に体験した。さらに参加者持参の幼児の描画作品について意見交換

した。また、治療行為としての造形活動と学習としての造形活動との相違点についても質疑がなされた。

次に栗山が「美術教育におけるセラピー的視点の再検討」と題して研究発表した。以下主な内容：「今日の我々がアートセラピー的な観点から美術教育の諸実践を分析・評価し、新たに実践を試みようとするとき、実はそれは約50年前の創造美育運動の考え方、すなわち＜抑圧からの解放＞（素朴なフロイト主義といってもよい）からほとんど進展していないのではないか」という疑問のもとに、創造美育運動の特徴である、子どもの描画への臨床心理学的な着眼と分析という側面が色濃い当時の映画「絵を描く子どもたち」（栗山持参）を上映して全員で鑑賞した。そして上記の指摘点を参加者の大部分が納得した。こうして、「図画工作科や美術科が、今後もなお「豊かな情緒の育成」や「個性の伸長」といったように、子どもの心の成長へ大きく関わることを謳い続けるのであるならば、＜抑圧からの解放＞という考え方をあらためて考える」必要がある、と栗山が結んだ。

次に吉田が「冷蔵庫の残りもので作る焼き飯」（これは吉田の実践の質や性格を謙遜して比喩表現した文言）と題して研究発表した。以下主な内容：これまでに、「学力不振や不登校の生徒を積極的に受け入れる学校、多様な問題を背負った子どもが通うフリースクールやサポート校、小児がん等の難治性疾患の治療を行う小児科病棟や院内学級、過疎が進む離島・僻地の小さな学校など」の中で「美術という手土産を携えてささやかながら」、「いろんな環境の中で過ごす子どもたちや十代の若者たちと悪戦苦闘しながらお粗末な実践をやって」きた。とくに半年間で高校を放逐されたいわゆる最低の子との10年間にわたる付き合いがある。彼は自分（吉田）に、彼の没頭した競馬や競輪に関する手紙や風変わりな造形品を何度も何度も送ってきた。（これらの映像はコロキウムで上映された。）「私が行く先々の冷蔵庫」には、「鑑賞教育やら造形遊び」のような「上等な旬材を見かけたことはなく、食べかけのカマボコやら、野菜の切れっぱしに地物の食材がちょこっとある程度」であり、「それを使って毎回お粗末な「焼き飯」を皆で作って、おせっかいにただ振る舞うだけ」である。が、「香味料」だけはあしらう。その「香味料」とは、1「あばたもエクボ」（滑稽、奇知、ユーモア）、2「内角高めの危険球」（日常的諸関係から新たなイメージ世界へ）、3「アート・マインド」（カタチで世界を開く）である。

最後に、長谷川によって上記発表内容の纏めがなされ、次いでフロアーを交えて若干の討論をしたのち、ほぼ以下のような知見を得た。：美術教育の新たな可能性をセラピー的な観点から探るときには、診断・治療目的の造形活動と、自律的・主体的な学習としての造形活動との共通点及び相違点を見極めながら進めていく必要がある。すなわち診断・治療の世界と美術教育の世界との関係性を精細に尋ねていくことが必要である。

アートセラピー研究部会コロキウム

美術教育史研究部会コロキウム報告

部会代表　金子一夫（茨城大学）

美術教育史研究部会のコロキウムは、資料研究の面白さということに焦点を絞り「美術教育史資料調査研究の実際的諸問題」というテーマを掲げて開いた。近年の情報機器や情報サービスの発展には目を見張るものがある。インターネットにつながったパソコンがあれば、自宅にいながら文献や資料の収集と整理ができてしまうかのごとくである。しかし、この発展が研究水準の向上に連動しているわけではない。まず、以前の段階を知ら

なければ、現状を当たり前のこととして受入れてしまい、発展の恩恵は感じられないという心理的問題がある。次にインターネット上の情報データにならない原資料が多数あり、また情報データになったとしても、原資料の特定要素だけが抽出されるという情報化の問題がある。つまり、情報量が少なくなり、解釈を間違う危険性が増える。例えば、最近までの資料データは文字が判読できればよいというものがほとんどであった。遠隔地図書館の論文コピーサービスも目的論文だけしか意識していないと、隣により重要な論文が載っていることに気づかないことがあり得る。

情報手段の発展の恩恵は受けるとしても、歴史研究では原資料、あるいはそれに近い資料の調査が必須の作業である。当然、原資料調査の方に面白さや発見が多くある。以上のような趣旨の簡単なコロキウム基調を金子が述べた後に、原資料調査の面白さを楽しんでいるだけではなく、成果も挙げている、以下の４名が発表をした。

・岡崎昭夫(筑波大学)「ダウ関係マイクロフィルム資料の調査」
・長瀬達也(秋田大学)「『秋田県自由画教育の研究』の資料調査の成果と課題」
・有田洋子(常磐大学高校)「戦後鑑賞教育文献の調査」
・金子一夫(茨城大学)「図画教員の資料調査」

岡崎氏はアーサー・ウェズレイ・ダウの資料取得の過程を紹介した後、ダウの滞日日記のマイクロフィルムを丹念に読み、何が記述されているか確認する作業で当時の日本の社会風俗事項が明らかになっていく面白さを発表した。ダウの筆記体の解読の大変さ、日本語の音声筆記からそれが何を指しているかがわかったときのうれしさ等も伝わってきた。

長瀬氏は長年秋田県図画教育の調査をしている。『秋田魁新報』『秋田県教育会雑誌』秋田県師範学校『校友会雑誌』等にていねいにあたり、秋田県内の優れた教育実践者を何人も発掘している。今回は教育理論家・実践者であった教員石黒雄治の事跡を明らかにした過程を発表した。遺族が身近にいたこと、俳人としても名を知られていたことなどの発見等が紹介され、歴史研究の醍醐味を感じることができた。

有田氏は戦後鑑賞教育文献を調査していく過程で気づいた、雑誌等の巻号表記の問題を発表した。特に日本文教出版発行の広報誌『形―フォルム』の巻号表記の複雑さとその解明を中心に発表した。戦後の雑誌といえども公共図書館に全巻揃っているわけではない。各所に所蔵されている巻号の調査をし、所蔵者無しの巻号については推測をして全巻の表記を明らかにした。地味な作業とはいえ、後続研究者の困難を取り除くことになるであろう。

金子は既に発表した明治期全国図画教員勤務表に続く、大正・昭和期のそれの一部を紹介した。当時の職員録等における氏名表記の多様、誤植等があることを指摘した後、勤務表をつくることで図画教育の実態を一種の地図的な形で把握することができることを発表した。旧朝鮮や旧台湾の図画教育も何人かの図画教員で代表するのではなく、学校数だけ図画教育があった、例えば旧朝鮮は内地の四県分、台湾は一県分くらいの図画教育の量があったと捉えるべきと指摘した。

以上の４名の発表後に質疑が行われた。資料の解釈についての質問に対して、金子は「やはり経験と直観が必要である」と答えてしまい、後で実証的な研究を主張する立場からすると曖昧な回答であったと反省した次第である。

工作工芸領域部会コロキウム報告

部会代表　西村俊夫（上越教育大学）

研究部会コロキウム「工作・工芸領域研究部会」は13時から15時までの2時間、約60名が参加して開催された。テーマは「子どもと素材―素材・材料から工作、工芸教育について考える―」である。はじめに、部会代表者の西村俊夫から部会の目的や今回のテーマ設定の主旨等について説明を行い、続いて４人の部会員が実践報告等を行った。その後、参加者との質疑応答を行った。ここでは４人の発表の特徴と意義について報告する。

工芸や工作教育の活動では、材料・素材の持つ意味合いが大きい。今回の部会発表では、素材・

材料の持つ意味を問い直してみたいと考えた。そのことは、これまでの美術教育をあり様を検証することにつながり、さらに今後の方向性が見えてくるように思ったからである。図画工作や美術の授業で長い間行われてきた一般的な造形活動のプロセスにおいては、材料（素材）は表現のための「媒体」として位置づけられている。絵や立体で表す活動における絵の具、画用紙、粘土など、工作・工芸で使用される様々な材料などもそうした使われ方が一般的である。この場合、何かつくりたい“もの”があって、それが設定された手順にしたがって実現されることになる。しかし、この部会コロキウムでは、材料（素材）に関わることで“イメージ”や“思い”が生まれる過程そのものにも注目した。

4人の部会員がテーマに関連する教育実践等の発表をおこなった。最初の発表者である上越教育大学附属小学校の山之内知行からは、近年取り組んでいる「協働」をキーワードにした図画工作科の以下の3つの実践報告があった。①「「わりばしでコラボ」はホットボンドをつかってわりばしを組み合わせていく「造形遊び」の活動であり、②「ねん土でコラボ」は２人一組で巨大なねん土（約 30 kg）を媒介としながら表面・裏面を交互につくりかえていく活動である。③「あなからコラボ」は、画用紙に開けられた「あな」を媒介とし、表面・裏面にそれぞれの世界を描いていく活動である。３つの授業に共通して、協働して造形活動に取り組む子どもが個に閉じこもることなく、また集団にも埋没することもなくお互いの表現によって刺激し合い、高め合いながら、個性や独創性を伸張している姿が見られた。

上越市立城北中学校講師の石井大資は、第26回新潟県美術教育研究大会上越大会で発表した「藍のかたち－藍染めのさまざまな表情をさぐる－」をもとに、素材と子ども達の関わり合いのかたちについて報告した。石井は、「題材の魅力は、はじめから題材の中に存在しているとは限らない。授業の中で、生徒が周囲の仲間や材料、道具などとさまざまなかかわり合いをもちながら、自分自身のやり方で美術の活動に熱中することができたとき、はじめてそこに生徒にとっての題材の魅力が生まれてくると考える」と語る。授業の内容は、藍染料を使った染めの造形活動である。防染の道具として輪ゴム、紐、糸、ろうそく、割り箸や洗濯バサミなどを準備して活動を行った。生徒は、染料に浸す時間の調整をし、様々な風合いを楽しみながら豊かに発想していく。このような活動を通じて、生徒が、道具や材料、他の生徒とのかかわり合いから思いがけない発見をし、創造的な藍染めの新たな魅力に気付いて行くという過程が報告された。

西村ゼミに所属する福井一真（兵庫教育大学連合大学院博士課程上越大学配属）は、上越教育大学附属小学校で行った研究授業（4 年生）について報告した。この活動は、「いろんなかたちの木でつくろう」という廃材をつかった工作の活動で、題材のねらいは、・素材が有する多様なかたちから自分のつくりたいものを想起して活動に取り組む。・素材に働きかけ、その特性を知る。・素材に合った道具の扱い方や加工方法を創意工夫し、道具を安全に適切に使用する。・友だちと協力して活動に取り組み、感性の異なる友だちの作品の良さに気づく、である。授業では、児童がものをつくる行為を通して、図工や表現の意味を自分なりに考える様子を見ることができた。

山形大学の斉藤学は、素材と表現行為との基本的な関係について、大学での授業や自信の作品等を例に発表した。新聞紙を素材とした造形では、学生作品である新聞紙の「服」や「布団」、斉藤自身の作品である新聞紙の「テーブル」などが紹介された。１年分の新聞紙を束ねて作成されたテーブルは、上面が新聞紙の縁の集積で形成され、ものを「包み込む」特性を持つ。また、１辺２ミリの角材で 20 キロまで耐えられる構造物を作るという課題についての報告もあった。耐加重基準を 20 キロに設定したが、40キロを超える作品もあったという報告があった。これらの課題では素材の特性を理解し、その特性を十分に活かす加工法や接着法を見つけ出すことが重要になる。こうしたところに工作・工芸教育におけるものをつくることの教育的意義や素材・材料の持つ意味があると考える。

第 31 回美術科教育学会　佐賀大会【第1次案内】

美術科教育学会佐賀大会 運営委員長　前村 晃

第 31 回美術科教育学会佐賀大会は、
2009 年 3 月 27 日（金）・28 日（土）・29 日（日）に、
佐賀大学本庄(ほんじょう)キャンパスにて開催いたします。

《佐賀大会の概要》

■会期：2009 年（平成 21 年）3 月 27 日（金）・28 日（土）・29 日（日）

■会場：佐賀大学本庄キャンパス「教養教育機構棟 2 号館」
（佐賀大学正門に最も近い建物です）

■移動方法：

【空路】①各地空港より福岡空港へ移動し、「福岡市営地下鉄（直結）と JR 線（長崎・佐世保線）の乗り継ぎ」か「西鉄高速バス」（所要約 70 分）にて JR 佐賀駅へ
②東京・羽田空港あるいは大阪・伊丹空港より有明佐賀空港へ移動し、アクセスバス（所要約 35 分）にて JR 佐賀駅へ

【陸路】新幹線等で JR 博多駅へ移動し、長崎・佐世保線特急（所要約 35 分）にて JR 佐賀駅へ

【JR 佐賀駅から佐賀大学への移動】
①JR 佐賀駅南口よりタクシーにて佐賀大学本庄キャンパス正門前へ
②JR 佐賀駅バスセンター4 番のりばより「佐賀大学・相応線」「佐賀大学・東与賀線」に乗車し「佐大前（相応線）」か「佐大裏（東与賀線）」にて下車
（所要 15 分弱、ただし本数は非常に少ないため、①のタクシー利用をおすすめします）

■大会テーマ：「継承と発展」

■日程（予定）：
3 月 27 日（金）午後：受付、開会行事、研究発表、学会理事会
3 月 28 日（土）午前：研究発表　　午後：シンポジウム、講演会、懇親会
3 月 29 日（日）午前：研究発表、総会、閉会行事

■研究発表申し込み：同封案内書を参照

■研究発表申し込み方法：
「第 31 回美術科教育学会佐賀大会口頭発表申込書」に必要事項を記入の上、返信用の 80 円切手貼付済みの長 3 形封筒とともに、下記宛てに郵送して下さい。
申し込み締切日：平成 20 年 12 月 12 日（金）　＊最終日消印有効
郵送先：840-8502
佐賀市本庄町 1 番地　佐賀大学文化教育学部教科教育講座内
第 31 回美術科教育学会佐賀大会事務局　　栗山裕至 行

※連絡・問い合わせ先：
佐賀大学文化教育学部教科教育講座　前村　晃
(電話兼 Fax：0952－28－8336)（maemuraa@cc.saga-u.ac.jp）
佐賀大学文化教育学部教科教育講座　栗山裕至
(電話兼 Fax：0952－28－8342)（hiroshi@cc.saga-u.ac.jp）

2008(平成 20)年度 美術科教育学会第１回理事会 報告

事務局長　碓部洋司（愛知教育大学）

2008(平成 20)年度美術科教育学会第 1 回理事会は 8 月 29 日(金)午後 1 時から、名古屋市栄町にある愛知県芸術文化センター12 階アートスペース D で開催された。

会は、藤江充代表理事挨拶の後、増田金吾総務担当副代表理事が議長となって、以下の 9 議題の協議と 4 件の報告がなされた。閉会は 4 時 45 分であった。

理事会前夜、東海地方が大雨に見舞われた(岡崎・安城地区などに大規模な水害が発生した)ため交通機関に乱れが生じ、当日欠席をやむなくされた理事もあって出席は理事・監事等 15 名、欠席 9 名であった。

議題：

1. 学会誌編集委員会（論文投稿状況、査読者の決定、今後の日程等）

学会誌編集委員長金子一夫理事から学会誌第 30 号への論文投稿状況が報告されたのち、議題の協議に移った。協議題は、①投稿資格の確認（共著の場合の著者要件再検討の必要性)、②学会誌発行までの日程（10 月初旬査読結果発送、10 月下旬入稿､2009 年 3 月 23 日発行予定など)、③査読用紙と査読判定理由の確認、④著作権の問題（図版は原則として投稿者本人が Web 公開までを含めた承諾を得たものを使用する)、⑤学会誌の Web 掲載時の誤植等訂正要求への対応(冊子になったものをそのまま学術情報センターで PDF 化しているので、認められない)、⑥レビュー論文執筆者の選定、⑦学会賞選考委員及び委員長の選任であった。

なお論文の投稿申し込みは 55 件で、到着済みが 22 編､猶予願い提出済みで未着(9 月 1 日締切)の論文が 23 編、投稿取り止め 10 件である。昨年の投稿論文実数 57 編に比べると大幅減で、ほぼ平年並みの数に戻ったといえる。

2. 選挙管理委員会（2009 年度における理事選挙の実施に向けての最終確認等）

選挙管理委員の山田一美理事から資料が示され、美術科教育学会「会則」第 10 条（役員の決定)､「役員選出に関する諸規定」(理事選出規定、選挙管理施行規定）を確認、有権者規定を一部改訂した(入会 1 年未満の会員にも選挙権を認めた）のち､選挙準備･実施のスケジュールを決定した。理事選挙は来年（2009 年）1 月 1 日現在で有権者を確定し名簿を作成､10 月初旬に投票用紙発送、11 月初旬投票締め切りの予定である

3. 韓国造形教育学会との連携について

韓国造形教育学会の李会長等と協定書及び交流実施要領について、InSEA 大阪大会の機会に話し合うことができたこと、協定文書などについて説明があり、質疑と一部の文言修正を経て承認された。現時点での「交流協定書」は以下のようである。

学術交流協定書

韓国の韓国造形教育学会と日本の美術科教育学会は、両学会の学術研究の発展及び友好と相互理解に基づいた協力のため、ここに学術交流協定の締結に合意する。

1. 両学会は、双方の自主性を尊重し、平等互恵の原則に基づいて、次の活動を行うものとする。
   (1) 双方の会員の交流等
   (2) 資料や情報の交換等
   (3) その他、双方が必要と認める事業等

2. 前項の事業に関する実施要項は、双方の協議を経て定めるものとする。

3. 協定締結の有効期間は署名の日より 3 年間とする。
   ただし、有効期間終了 1 年以内に、いずれかの側からの申し出がない限り、自動的に 3 年間の更新がされるものとする。

4. この協定書は、日本語と韓国語でそれぞれ 2 通を作成し、双方とも保管する。

年　月　日　　年　月　日

4.『学会通信』への掲載記事と原稿依頼について（事務局）

学会通信第69号（本号）に掲載する記事の確認がなされ、本部事務局広報担当の樋口一成先生から関係者に原稿作成依頼をすることが承認された。

5. 会員管理と名簿の作成について（事務局）

昨年度配布・回収された会員調査書の項目を確認の後、会員名簿に載せる事項を検討した。名簿掲載情報は最低限に止め、「氏名」「自宅住所」「所属」「連絡方法（メール・TEL・FAX)」の各項目とし、これらのうち非公開の指示があった項目については掲載しないことを確認した上で、承認された。

6. 新入会員の承認（事務局）

28 名の入会申込書綴りが回覧され、全員の入会が承認された。これに合わせて本部事務局の樋口先生から資料をもとに会員数、会費納入状況等の報告があった。ちなみに8月27日の時点で、会員数は正会員508（新入会員を含む）である。

7. 2009年度（平成21年度）大会開催について（事務局）

藤江代表理事から、次年度の学会大会開催大学が未定である旨が示され、自薦・他薦を問わず候補を挙げるよう要請があった。今年度は佐賀大学であるから来年度は東日本で開催したらどうかという発言もあったが、具体的な大学名は出ず、佐賀大会までには特定の候補を決める予定で進めることが了承された。

8. 日本国内美術教育関連団体との連携について(代表理事)

藤江代表理事から本学会と大学美術教育学会、日本美術教育学会との連携を進めていくことについての提案がなされ、意見交換をした。そうした連携を進めていくことを検討していくことが承認された。

9. その他

その他として以下の4件が動議され、審議した。

① 柴田理事から、「拡張された〈美術／教育〉の基本構造と可能性を考えるための部会」(略称名：現代〈A／E〉部会）を設立する申請がなされ、申請書の記載事項を研究部会に関する規定（1995年3月30日総会承認）に照らし検討したうえで、同研究会の設立が認められた。(本号別頁参照)

② 礒部事務局長より、本年度の会計に関する中間報告が口頭でなされ、了承された。8月26日現在で、会費等の入金は約270万円、支出は、『通信』の印刷・発送費、InSEA 大阪大会への寄付金、学会紹介英文パンフレット作成費、地区会開催への補助費等で、合わせて186万円ほどになる。

③ 礒部事務局長から、理事会旅費の見直しに関する提議がなされ、承認された。ちなみに現行はＪＲ等の片道普通運賃のみを支給している。しかし、実費との差が大きい。特に、遠距離を往復する理事の負担は大きい。それを是正するために、特急料金等を含む片道運賃の実費を、来年度から支給することにした。

④ 樋口広報担当から、住所不明（郵便物返送）者リストが示され、各理事にその所在の確認が依頼された。

報告：

1. 群馬大会報告（新井理事に代わり事務局）

群馬大会運営委員長の新井哲夫理事が海外出張中のため、礒部事務局長が資料「第30回美術科教育学会を終えて」（新井理事作成、本号別頁）をもとに概要の報告を行った。

2. InSEA 大阪大会報告

InSEA 大阪大会副会長の花篤實理事、事務局長の岩崎由紀夫理事、事務局・永守基樹理事から参加者数、発表件数、会計などの概況が報告された。(詳細については本号２～５頁を参照)

さらに、岡崎昭夫理事から学会紹介英文パンフレットに関する報告があった。（16 頁参照）直江俊雄理事から InSEA 大阪大会で配布した新しい学習指導要領の英語、韓国語、中国語訳付きパンフレットについて、奥村高明教科調査官を代表とする科研で作成したものであり、研究分担者である藤江代表理事と直江理事へ配分された物の中から、美術科教育学会の全会員に送るという報告があった。

3. 東西地区研究会の報告及び今後の計画について

東地区は、会長の宮脇理理事が所用により欠席のため山田理事が宮脇理事のメモを代読し、西地区は会長花篤實理事が地区会報告を行った。

東地区では東京家政大学の結城孝雄先生による研究会が 6 月 28 日に行われたことと、山田一美理事が 12 月、直江俊雄理事が来年 3 月上旬に実施予定であることが報告された。また西地区では 7 月 5 日に大阪成蹊短期大学の丁子かおる先生を中心に研究会を行うこと、さらに今後、11 月 15 日に徳島県立近代美術館で研究会を実施する予定であるなどの報告がなされた。詳細は、同封のチラシをご参照ください。

（※赤字部分は、郵送させていただいた「学会通信 69」の内容を一部修正させていただいています。ご注意ください。）

4. 佐賀大学での大会準備状況と今後の計画について（佐賀大学）

第 31 回美術科教育学会大会運営事務局長である佐賀大学の栗山裕至先生から資料「第 31 回美術科教育学会 佐賀大会【第１次案内】」（本号別頁）が示され、大会準備状況と大会運営案、交通アクセス等について詳細な説明があった。また、「プレ学会シンポジウム」が 10 月 11 日(土)に、「これからの図画工作科・美術科をめぐって―教科における『指導』とは―」をテーマに佐賀大学文化教育学部附属小学校で開催されるとの案内があった。

美術科教育学会紹介英文パンフレットの作成

岡崎昭夫（筑波大学）

この英文パンフレットの企画が藤江代表理事によって提案されたのは、昨年の９月の学会理事会においてであった。日本の美術教育の歴史的な出来事として特筆される国際美術教育学会の世界会議が大阪で開催されるという好機をとらえ、世界から大阪に参集してきた各国の美術教育者に本学会を紹介する企図である。

その理事会において、昨年 10 月の学会通信に掲載されているように、英文パンフレット作成が岡崎に一任された。これを引き受けた当時は、４頁くらいなら印刷も含めて二ヶ月くらいで作成できると考えていたが、海外の学会の HP を参照して実際に作成してみるとその倍近くの三ヶ月半もかかってしまった。英文草稿（6000 ワード）に二ヶ月、英文校閲に半月、デザインと印刷に一ヶ月を要した。パンフレットを大阪での世界会議の事務局長の岩崎先生に送付したのが本年の７月中旬すぎで、英文の内容に関して理事会に諮る時間的余裕がなく、人名等の誤植をさけるには、もう少し早くとりかかればよかったと反省している。

この通信に同封されている学会紹介パンフレットは A4版８頁で、藤江代表理事による以下のような「ご挨拶」の表紙で始まる。

「大阪の InSEA 世界大会へようこそいらっしゃいました。この大阪や京都のある地域は、日本の伝統文化の源になった風土や生活習慣が残っている ところです。

研究発表の合間に、京都や奈良などの日本の旧い都を訪問されることをお薦めします。美術科教育学会は、日本を代表する美術教育間学会の一つ で、この大阪大会の協賛団体の一つでもあります。 このパンフレットは、日本の美術教育と本学会の活動について、ご紹介するためのものです。今後の、皆様の教育や研究に少しでもお役に立てば幸いです。」

本文は３項目で構成されており、最初の「日本の学校美術」(School Art in Japan)の項目では、1872 年に始まった日本の美術教育の略史を述べ、現在の教育制度における教科教育としての美術教育、約 10 年に一度改訂されてきた学習指導要領、教科書の無償配布などについて紹介している。

「美術科教育学会」(Bijutsuka Kyouiku Gakkai)の項目では、まず学会の創設(The founding of the Association)に関して、1979 年に奈良教育大学で開催された「大学美術教科教育研究会」を母体として、1982 年に「美術科教育学会」と名称を定め、それ以来我が国の美術教育研究を推進してきたことを述べている。次に本学会の現在の会則(The constitution)を、第一章「総則」、第二章「会員」、第三章「役員」、第四章「学会及び会議」、第五章「会計」、第六章「運営組織」、第七章 「賞の授与」の順で、日本語の原文に即して翻訳している。さらに現在就任している役員、理事会、監事の人の名前、職名、学部名、大学名をリストアップしている(Executives、 the Board of Directors、 and Auditors)。続いて、本学会の 30 年の発展(The development)を、歴代の代表理事の貢献、学会の開催、シンポジウム、地区研究会、学会通信などを通して、解説している。また、本年３月に刊行された学会誌(The official journal)に掲載された論文名をリストアップするとともに、学会賞(Awards)としての「美術教育学」賞の歴代の受賞者とその論文名を挙げている。最後に、本学会の年次大会における海外の研究者による講演や海外の学術誌や国際会議報告書に掲載された本学会員の英語論文を紹介して、本学会による国際交流(International exchanges)の展開を説明している。

「国際美術教育学会への本学会の貢献」(Contribution of the Association to the Development of InSEA)の項目では、まず国際美術教育学会の関係(Involvement with InSEA) において、アジア地区選出の歴代の評議員に就任した本学会員の名前を挙げるとともに、1980 年代からの世界会議（1987 年４月のハンブルグ、1993 年８月のモントリオール、1999 年９月のブリスベン、2002 年８月のニューヨーク）や地区会議（2007 年８月ソウル）への本学会員の参加者名と報告書に掲載された論文を提示している。最後に、1998 年８月に東京で開催された地区会議の体験を基礎に、本学会の多数の構成員が本年８月に開催される大阪での世界会議(World Congress in Osaka)の成功に向けて奮闘していることが示されている。

この美術科教育学会紹介英文パンフレットの内容が、今後の日本の美術教育研究の紹介、美術教育の国際交流、英語論文の作成、英語論文の講読、あるいは学会のＨＰの作成等の一助になれば幸いである。

新しい部会を始めます

部会仮代表 柴田 和豊 (東京学芸大学)

８月 29 日の学会理事会で**「拡張された＜美術／教育＞の基本構造と可能性を考えるための部会(略称：現代＜A／E＞部会）**の設立が認められました。部会の趣旨は、設立申請書に記した以下の文章の通りです。

いま世界は、地球規模の巨大な世界システムの中に人々を組み込み、人々は「生きにくさ」の中を生きていかざるを得ない状況におかれている。新たな世界システムは、これまでの社会・文化の諸秩序や原理の変容を促さずにはおかず、「教育」も「美術」も、したがって「美術教育」も根底からその基盤を揺さぶられている。それゆえ、私たちには「美術教育はいまなお可能か」「可能であるとしたらどのような営為として捉えられ、実践されるべきか」を明らかにしていくことが求められている。

ほんらい美術教育は、美術・教育・人間の関係性の中に成立する特殊な現象であり、その在り方・概念は固定的なものではない。私たちは困難な時代であるからこそ、美術教育の可能性(可能態)を様々に考え、美術教育の新たな(拡張された)姿を浮かび上がらせていくための、基本的論議を進める場を必要としている。そのような思いから、「拡張された＜美術／教育＞の基本構造と可能性を考えるための部会」の設立を希望する次第である。

美術・教育・人間の相関を尋ねることからは、二つの大きな流れが出現することでしょう。一つは美術教育の存在構造についての基礎論的な問いであり、もう一つは時代・社会・文化の現象に密着した研究です。両者は全く異質なものと映りがちですが、本源と現象を行き来する中で生まれてくる様々な論議を通して、現実を乗り越える道筋が見えてくると考えています。

申請段階での同人は、相田隆司、赤木里香子、板良敷敏、上山浩、大島賢一、佐藤賢司、柴田和豊、島田佳枝、神野真吾、谷口幹也、長田謙一、三浦浩喜、矢木武、山崎明子、山田康彦、吉田悦治、吉村壮明の 17 名です。運営体制は、新たに参加される方々に加わって頂き、これから煮詰めていきます。大まかな見通しとしては、来年の佐賀大会までに正式発会に向けた全部会員による会合を、大会期間中には部会総会と研究フォーラムを、開ければと思っています。それらに至るプロセスは、部会員が各地にいることから、メーリング・リストによる対話となります。**関心がある方は目下の世話役の谷口幹也さん（九州女子大学 tmikiya@kwuc.ac.jp）までご連絡下さい。**大歓迎です。

以下に同人の声を抄録しておきます。

○美術制度史とジェンダー論が研究テーマで、美術教育の隣接領域に身を置いているようなところがありますが、皆さんと共有できる問題はたくさんあるのではないかと感じています。新たな議論の枠組みから生まれる研究の広がりを実感させていただければと思っています。
山崎明子(お茶の水女子大学ジェンダー研究センター)

○現代の子供たちがおかれる実際の状況に即しながら、しかし単純な教材開発や授業研究ではない、多面的な議論、研究を行える場としての部会を期待しています。
大島賢一（東京学芸大学連合大学院、千葉大所属）

○従来の美術教育の議論にとらわれず、美術教育について語り、構築する場になって欲しいと思います。そのためには、美術教育を研究する人ばかりが参加するのではなく、垣根の低い出入り自由な、境界線が曖昧な、自由な組織であって欲しいと思います。そして、ソフトな面持ちで、実は野性的、みたいな部会だと良いですね。
神野真吾（千葉大学）

○美術と教育のさまざまな関わり方を再確認する場の生成を願う。部会名にある＜／＞は、AとEを個々それぞれのイマジネーションで接続してよいことを示している。しかしながら「なぜ？」そのように接続しなければならないかを語り合っていきたい。
相田隆司（東京学芸大学）

○現代社会におけるコミュニケーションの危機的状況を超える＜呼応の関係性＞を創出する美術教育のあり方を理論的・実践的に探究しています。
島田佳枝（実践女子大学非常勤講師）

研究ノート

学校教育における美術教育の韓・日比較研究－韓国の第１次版と日本の昭和 22・26 年版学習指導要領を中心に－

千 凡晋(東京学芸大学大学院連合博士課程芸術系教育講座３年)

韓国と日本との美術科[1]における学習指導要領[2]を比較する際、韓国の第１次版と日本の昭和 26 年版が酷似していることに疑問を感じた。第 2 次世界大戦後(以下、「終戦後」)の韓国における教育は日本からの影響をすべて払拭し、新たな教育内容を目指して韓国の最初の学習指導要領が作成されたと思っていた。しかし、どうして日本のものとあれだけ似ているのだろうと思ったのが、この研究の始まりだった。

1．韓国と日本の美術教育史を比較する意義

美術科・歴史・比較、この三つの研究分野を合わせ、韓国と日本におけるある時期に行われた美術科教育を帰納的な研究方法を用いて総合的に比較することが本研究の目標である。

韓国における近代的意味の美術科教育の始まりは、明治 28 年(1895)の韓国独自の小学校令により尋常科と高等科に「図画」という教科が導入されたことからだと言える。日本の場合、明治 5 年(1872)の学制により、小・中学校に「罫画」、「画学」が導入され、明治 14 年(1881)の「小学校教則綱領」、「中学校教則綱領」によって学校教育に「図画」科が登場することになった。

そして明治 43 年(1910)、韓国が日本に合併され、戦争が終わった昭和 20 年(1945)8 月 15 日前まで同じ教育制度の下で学校教育及び美術科教育が行われた。

そのことから少なくとも終戦までは韓国と日本における美術科教育の内容も非常に類似していると言えるだろう。

そして終戦後、韓国はアメリカ軍により、日本はアメリカを中心とする連合軍により占領されることによって、社会、教育など全体を通して全面的な改革が行われた。その一つである美術科教育も両国それぞれに新しい教育理念を基に、新たに改革され、今日に至った。

ところで、19 世紀末から今日まで、韓国と日本の美術科教育における歴史を振り返ってみると近代から現代に差しかかる終戦直後の変化はどの時期より重要な意味を持っており、もっとも注目すべき時期であると考える。

つまり、類似した形で進んできた両国の美術科教育が、終戦後アメリカ占領期を含め、1950 年代にどのように変わり、定着されるようになったのかという比較は、美術科教育の歴史研究として意義があるだろう。この比較により、その時期の美術科教育を原点として発展してきた両国の今日の美術科教育が抱えている様々な問題点を解明することができる。同時に、将来における美術科教育を展望するヒントになることができるのではなかろうか。

ところが、アメリカによる占領期から 1950 年代にかけての美術科教育における韓日比較研究は、盛んに研究されているとは言えない。学習指導要領だけについて言えば、比較がなされた研究があるとは言え、両国で発表されている美術科学習指導要領の内容のみの単純な比較であって、さらにその対象が殆ど近年のものに過ぎない。

そして韓国においては昭和 25 年(1950)に起きた朝鮮戦争など様々な理由により資料の殆どがなくなっている状況であって、終戦直後にかかわる文献研究は非常に少なく、研究を進めるのが極めて難しい状況である。

2．現在までの研究結果及び研究課題

韓国と日本の小学校における「美術科学習指導要領」の初期のものから現行のものまで比較を行った。その結果、韓国と日本の美術科学習指導要領の初期のものは類似している点が多く、中期から現行のものに至っては両国ともに独創性を持って発展してきたことが分かった。その比較研究で特に注目したのが、昭和 29 年(1954)に出された韓国の第 1 次学習指導要領と日本の昭和 26 年版(1951)学習指導要領が酷似していたことで、それは中学校の美術科学習指導要領も同様であると言える。

しかし相違点として挙げられるのは、美術科領域の内容である。韓国では終戦前の「図画」、「工作」、「習字」という教科がすべて統合され小・中学校とも「美術」となったことに対し、日本では「図画」と「工作」だけが統合され、小学校では「図画工作」、中学校では「美術」となった。そして「習字」は「国語」科の一つの領域として配置された。その内容を検討するため、韓国と日本との小・中学校の美術科と国語科における学習指導要領を初期のものから現行のものまで比較し、その研究結果については『第 32 回 InSEA 世界大会 2008in 大阪』において口頭発表を行った。

その結果から、両国において東洋の伝統文化の一つとして類似した形で発展してきた毛筆による「習字」教育が終戦を基点に異なった形で展開されていることが分かった。韓国では、毛筆を含む書用具から表現できる芸術

性・造形美・個性と創造的で審美的な態度の育成を目指しているため、美術科の中で取り上げることになった。一方、日本では、文字の芸術性を求める書道教育の基礎段階として、文字が持っている言語表現力を強調し、日常生活の中で文字を正しく整えて速く書くという実用性を目指しているため、国語科の中で取り上げることになった。

さらに、当時両国でどのような経緯で学習指導要領が作成されたのかを探るため、韓国と日本における「米軍政[3]、GHQ」期に行われた美術科教育、その中でも両国の教育改革にもっとも大きな影響を与えたアメリカ教育使節団の活動を調べる必要があり、現在、その調査に取り掛かっている。

その上、日本の昭和 26 年版「美術科」学習指導要領の基になっている昭和 22年版は、アメリカのヴァージニア州の『コース・オブ・スタディー(Course of Study) 』を参考にしたということもあり、当時参考にされたヴァージニア州のコース・オブ・スタディーの内容を検討する計画である。

また、学習指導要領というものが、両国において学校現場でどのように取り上げられ、どのように扱われたのか、そして当時の学校現場ではどのような美術科教育が行われたかに関連する資料の検討や当時の教員、教育関係者へのインタビューを通じた検証など、教育現場での状況も含めて総合的な比較を行うことを目指している。

---

1 韓国と日本の美術科教育に関わる教科名が異なっているため、両国の小・中学校を合わせて「美術科」という教科名を用いることとする。尚、本研究では学校教育としての美術教育を扱うこととし、前述した両国の教科名も含め、「美術科教育」という用語を用いることにする。

2 韓国において日本の「学習指導要領」に該当するのは「教育課程」である。しかし、韓国の教育課程は教育全体にわたる計画としての教育課程(カリキュラム)と、その教育課程の基準として法令化し、公布された学習指導要領(コース・オブ・スタディー)としての二重の意味を持っている。本稿においては学習指導要領という用語を統一して表記することにする。

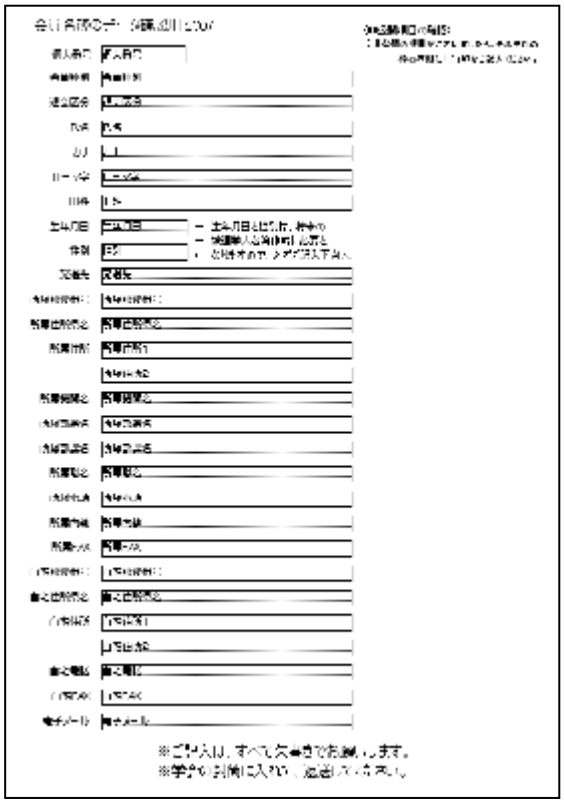
3 「在朝鮮米陸軍司令部軍政庁」の略。

事務局からのお願い

■封筒に貼っているラベルにある数字は、2008 年 9 月末日現在での会費未納額です。ラベルの数字が「－8000(マイナス 8000)」や「0」以外の方は、できるだけ早めの会費納入にご協力をお願い致します。

■所属先に変更があった会員の方の郵便物が、事務局に返送されてくることが多くなっています。郵便物の送付先を「所属先」にされている方は、特にご注意ください。

《注意》郵便物が一度返送されてきた方の郵便物は、次回から送付先不明として発送を止めさせていただいております。ご注意ください。

■現在､会員名簿を作成する計画を進めています。過日郵送させていただいた会員名簿のチェック表を未だ事務局へお送りいただいていない方は、至急お送りいただきますようにお願いします。

（※新しく会員になられた方の中には、書類を送らせていただいていない方がいます。）